

# 異文化研究交流センター ニュースレター

## ご挨拶

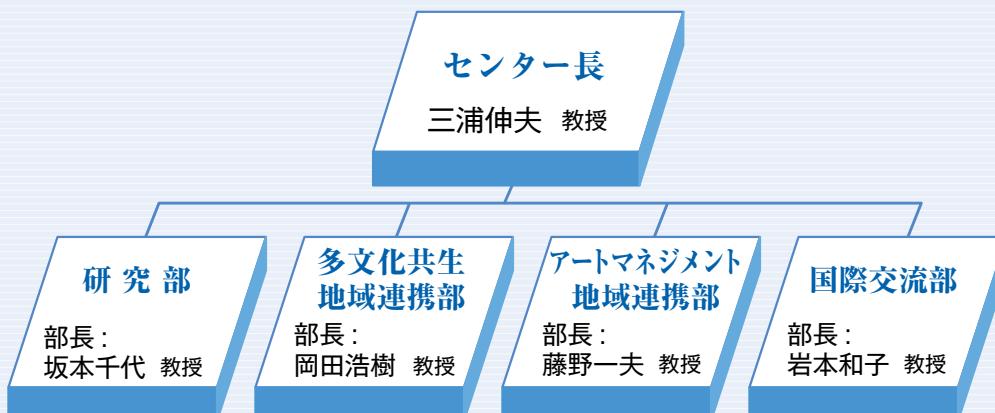
異文化研究交流センター (Intercultural Research Center: 略称は IREC) は、国際文化学部所属のセンターとして 2006 年 7 月に開所しました。2 年目からは国際文化学研究科所属となり、その後メディア文化研究センターも別個に発足し、IREC は現在、研究科の異文化研究分野の拠点としてさまざまな活動を行っています。

異文化研究は国際文化学のひとつの重要な研究領域であり、IREC はそのために 4 部体制をとっています。研究部は最近では EU の言語問題等を中心に研究会や講演会を開催しています。アートマネジメント地域連携部では、神戸市を中心に地域活動と連携してコンサートや芸術関係の講演会を開催しています。多文化共生地域連携部では、地域在住の外国人の生活にかかる諸問題を調査研究し、と同時に交流を深めています。最後に国際交流部は、海外の大学との学生や研究者の交流を通じて国際文化学の実践的研究と活動を進めています。昨年度からは学位取得者 11 名を協力研究員として新たに採用し、活動の増進を図る体制作りを試みています。とはいえたまだ試行錯誤の状態で、皆様方のさらなる御支援を心より期待しています。



センター長 三浦 伸夫  
(国際文化学研究科教授)

## センターの構成



### ● 2010 年度学術推進研究員 山田勲之

### ● 2010 年度協力研究員と研究テーマ

- ・王念家 「中国における児童福祉事業の展開」
- ・鬼頭尚義 「歌人伝説の形成と展開」
- ・倉田誠 「淡路瓦産地における産業体系の変化と地域社会の再編」
- ・徐小潔 「新聞からみる日本社会の多文化化—神戸を中心に」
- ・高岡智子 「東ドイツとハリウッド映画音楽の比較研究—文化政策とメディア史的観点から—」

・張曉旻 「台湾における買売春研究」

・沼田里衣 「音楽療法、コミュニティアートにおける創造的音楽活動について」

・野村恒彦 「19世紀英國における科学（特に数学）と自然神学」

・秦美香子 「ジェンダーの見地からの漫画研究」

・ヴィヴィアン・ブッシングル-カバリ

「在日外国人児童の言語学習状況」

・松井真之介 「フランスのアルメニア人ディアスボラのアクチュアリティに関する研究」

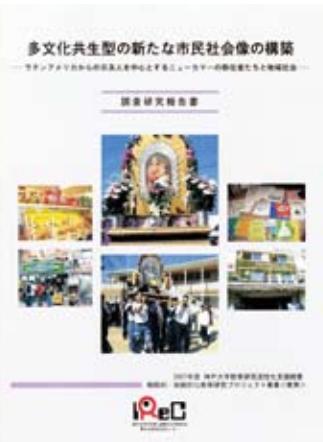
# 活動歴

## 2006年度

- マイクロステートの文化政策と日常的実践に関する国際共同研究と海外ネットワーク拠点構築  
—オセアニアとカリブ海におけるグローバル化、ポストコロニアリズム、ローカル化の比較—  
(研究部プロジェクト／代表者 柴田佳子)
- 阪神、淡路地域における民族文化伝承の現代的展開に関する研究  
—淡路人形浄瑠璃を中心に—  
(研究部プロジェクト／代表者 影山純夫)
- 神戸市及び兵庫県の文化政策と連携したアートマネジメント教育  
—国際芸術祭の企画運営を中心に—  
(地域連携部アートマネージメント部門プロジェクト／代表者 藤野一夫)
- 阪神間モダニズムと近代芸術受容の再評価研究  
—深江文化村が西洋文化受容に果たした役割について—  
(地域連携部アートマネージメント部門プロジェクト／代表者 楠岡求美)
- フィールドワークに基づく異文化理解と地域連携教育の推進  
—神戸周辺の在日外国人と地域社会についての実態調査を中心として—  
(地域連携部多文化共生部門プロジェクト／代表者 岡田浩樹)
- 中東・日本間の知的交流型研究を通じて現代中東の国際関係と政治変動を理解するためのプロジェクト  
—湾岸諸国を中心に(略称:中東政治研究プロジェクト)—  
(研究部プロジェクト／代表者 中村覚)



報告書「神戸周辺の在日外国人 (3) —ベトナム・コリアン・チャイニーズ」(2007年3月発行)



報告書「多文化共生型の新たな市民社会像の構築—ラテンアメリカからの日系を中心とするニューカマーの居住者たちと地域社会」(2008年3月発行)

## 2008年度

- 多言語・多民族共存と文化的多様性の維持に関する国際的・歴史的比較研究  
(研究部プロジェクト／代表者 石川達夫)



講演会(2008年11月25日)「グローバリズムと多民族・多文化社会—中国の現実、世界の課題」

- 長田区アジア系定住外国人ライフストーリー調査  
(多文化共生地域連携部プロジェクト／代表者 岡田浩樹)
- 公共文化施設の公共性についての調査研究  
—県立劇場を中心に—  
(アートマネージメント地域連携部プロジェクト／代表者 藤野一夫)

## 2009年度

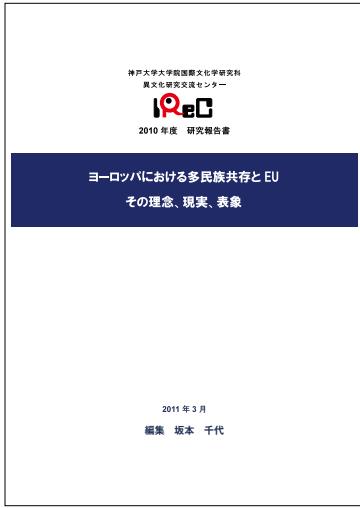
- ヨーロッパにおける多民族共存とEU  
—多民族共存への多視点的・メタ視点的アプローチ—  
(研究部プロジェクト／代表者 石川達夫)
- 長田区アジア系定住外国人ライフストーリー調査(2)  
(多文化共生地域連携部プロジェクト／代表者 岡田浩樹)
- 公共文化施設の公共性についての調査研究  
—理論的基礎を踏まえて—  
(アートマネージメント地域連携部プロジェクト／代表者 藤野一夫)

# 2010年度活動報告

## 研究部

### ヨーロッパにおける多民族共存と EU —その理念、現実、表象—

(プロジェクト代表者：坂本千代)



報告書

「ヨーロッパにおける多民族共存と EU—その理念、現実、表象—」(2011年3月発行)

文学をはじめとする芸術分野でのその表象を考察しました。今年度のプロジェクト・メンバーの活動は以下のとおりです。

- ヨーロッパにおける実際の多民族共存の場とそこで生じてきた問題について、通時的・共時的に分析・考察しました。
- EU、ヨーロッパ各国、国連などが、多民族共存、マイノリティと少数言語保護等のためにいかなる理念を掲げ、いかなる政策を実施してきたかを分析・考察しました。
- ヨーロッパにおける多民族共存あるいは多文化共存が芸術



第2回講演会（2010年12月3日）「21世紀のフランス文学—資本・越境・記憶」 講師：野崎歓氏

作品や文化活動においていかに解釈され表象されているかについて分析・考察しました。

- 外部から研究者を招いて講演会などを開催しました。

### 19世紀の科学と文化 — 交流の視点から —

(プロジェクト代表者：三浦伸夫)

「二つの文化」という考え方があります。文系文化と理系

文化です。しかしこんにちは、環境問題、医療問題はもちろん国際関係論にいたっても問題を根本的に考えるさいに、文系的視点と理系的視点をあわせ持たねば物事の本質を捉えられないような状況でしょう。学際的な多眼的視点で文化の問題を教育研究することを目指して設立された国際文化学研究科という場は、文化の問題を科学や技術を視野に入れて研究するにはもつともふさわしい場であると考えられます。



第3回研究発表会（2011年1月26日）「19世紀英國科学者によるグランド・ツアーニューヨークを中心」発表者：野村恒彦協力研究員

19世紀は「科学」の時代の幕開けです。科学が社会的に認められ始めた時代で、文化史や当時の社会史を見る場合も科学史や技術史の知識を前提にせねばならないでしょう。この時代はまた「科学文化」の成立とも言うことが出来ます。本プロジェクトは、科学技術の誕生したこの19世紀に焦点を当て、その時代における文化の中の科学技術をとりあげ、「科学文化の誕生」という新しい枠組みを設定し、その発生と拡散を見ていきます。とりわけ西欧近代科学の非西欧諸国への移入問題や、それにつわる翻訳の問題、伝統文化との軋轢問題、科学や技術格差による諸問題を中心に研究します。

## 地域連携部

(プロジェクト代表者：岡田浩樹 教授)

2010年度多文化共生地域連携部は、地域連携協定に基づき、(1) 兵庫県国際交流協会、(2) 神戸を中心とする在日外国人および支援諸団体、(3) 南あわじ市との地域連携活動を行っています。

(1) については、兵庫県国際交流協会が主催する Oxbridge English Summer Camp の実施校として、英国 Oxford, Cambridge 大学の海外英語教育実習に協力、両校から 6 名の

学生が来日し、国際文化の学部生 40 名が参加してセミナーの開催、交流を行いました。(2)については、神戸定住外国人支援センターに外国人児童学習ボランティアを派遣するとともに、神戸在住の外国人高齢者（帰化者、中国残留孤児含む）延べ 14 名に対するライフストーリー、生活実態調査を実施、合わせて長田において月に一度の研究会を行いました。この成果については兵庫県自治学会の助成を受けて、地域の人々にも開いた公開シンポジウムを開催する予定です。(3)については、南あわじ市での大学院生フィールドワーク実習を実施、地場産業の瓦産業についての調査を行い、その成果は近々調査報告書として地域に還元する予定です。また南あわじ市が主催したアジアこども映画祭中四国関西大会に協力、また淡路人形浄瑠璃についての研究調査を寺内直子教授のプロジェクトで開始し、これをサポートいたしました。ご協力いただいた関係諸機関、地域の方々のご理解、ご協力にあらためて感謝申し上げます。



長田区での研究会にて

## アートマネジメント地域連携部

（プロジェクト代表者：藤野一夫 教授）

〔はじめに〕

本年度のアートマネジメント関連の地域連携プロジェクトは、前年度まで 3 年間継続された「現代 GP」枠での事業助成が無くなり、組織運営の面でも本プロジェクトに特化した研究員の雇用が出来なくなつたために、大変困難な船出となりました。しかし「継続は力なり」と信じて、これまで培ってきた産官学民連携とグローバルなネットワークを継承し、学生の自発性を尊重するプロジェクトを展開。アートには社会的課題を発見し、その解決へと導く力がある、という認識を深め、繰り返し実証できた一年となりました。

### 〔活動実績〕

2010 年 4 月 24 日開催の「ウォールアートフェスティバル・イン・ニランジャナスクール 2010」凱旋報告会（参加 60 名）では、インド・ビハール州の寒村にある小学校で行われたアートフェスティバルの模様が、参加アーティストとボランティアスタッフによって熱く語られ、その写真展とともにアートのもう一つ力に深い感銘を受けました。想像を絶する幾多の困難にもかかわらず、それらを克服して「ウォールアートフェスティバル」が成功した秘密は、その一番大切な目的が、「ビハールの子どもたちに、アートの力を伝えたい！」という思いに貫かれてきたからです。しかも、そのアートの質は妥協を許さぬものでした。子どもたちは、たとえ貧しい境遇でも、人間としての精神の力を集中すれば、世界や宇宙と、自分たちの生きる場とのつながりに、自然と目を開くことができると気づきました。

アート NPO と大学と公共文化施設の連携の事例を挙げましょう。ゴールデンウィークの 5 日間、ドイツからデュッセルドルフのダンスカンパニー「カバヴィル」が来日し、NPO・ダンスボックス神戸および灘区民ホールと連携して、インターカルチャラル・ワークショップ「フレームウォーク」を開催しました。制作テーマは「ヴァーチャル・アイデンティティ」。「カバヴィル」は、文化的・社会的・民族的背景の異なるドイツの青少年を主体とした社会包摂系アート NPO ですが、高い芸術性を追求しています。ドイツ側 15 名（カバヴィルのメンバー）と神戸側 15 名が出会い、5 日間の共同制作の成果を発表しました。神戸大アートマネジメント研究会の学生たちは運営と通訳を担いましたが、その大半は、いつのまにか「出演者」に変身。国際芸術交流プロジェクトの真髄を味わいました。



日独文化交流インターカルチャラル・ワークショップ「フレームウォーク」

6 月 8 日（ギャラリー島田、45 名）と 9 日（神戸旧生糸検査所、80 名）の 2 回にわたって、トークイベント「場所とアートの

魔術性～神戸と別府の場合～」を開催しました。2009年に別府で開催された国際現代アートフェスティバル「混浴温泉世界」の総合プロデューサーであり、(NPO) BEPPU PROJECT の



Baby Meets Music ~0歳からの親子コンサート~

代表・山出淳也さんをお迎えして、神戸の文化人らとのトークを開き、場所の魅力とアートの結びつきについて考える企画。予想以上の反響があり、神戸の魅力を新たな視点から発見する最良の機会ともなりました。

アートマネジメント地域連携部の最大のプロジェクトは、2006年から開催している神戸国際芸術祭の企画運営です。本年度は9月23日から26日にかけて、神戸市内の公共ホール3ヶ所で計5回の室内楽コンサートを開催（1500名）。ショパンとシューマンの没後200年をテーマに独自のプログラムを練り上げ、欧日の気鋭の音楽家が熱演を繰り広げました。3年前から実施しているコンサートボランティアセミナーも定着し、のべ100名以上の学生と市民が芸術祭スタッフとして参加しました。とりわけ小学生のためのコンサート「みんなのフィガロ」（600名）は、企画運営の一切を学生が担い評判となりました。

### 〔成 果〕

これらのプロジェクトはどれも地域社会に開かれた、アートと社会の架け橋をめざす試みですが、それは学生にとってもアートマネジメント教育の良き実践の場となっています。その最良の成果は、2011年2月28日（灘区民ホール）と3月1日（明石市子午線ホール）で計4回開催された「Baby Meets Music 0歳からの親子コンサート」に結実しました（550名）。アートの力で子育て支援を試みる社会実験でしたが、その反響の大きさには驚きました。このように学生たちは、他者と出会

う幸せや歓びをアートによって生み出すこと。しかもふだんは、そのような機会から疎外されがちな人たちを対象に、あえて困難な企画に挑むことで、アートマネジメントの歓びと幸せに自らも出会うことができました。

なお2011年3月18日には、金沢21世紀美術館館長の秋元雄史氏をお招きし、「アートマネジメント若手フォーラム in Kobe」を開催いたしました。大学や職場の垣根を越えて文化政策やアートマネジメントを専攻する学生、若手アートマネジャーがつながり、意見交換する場を目的としたフォーラムです。



『讀売新聞』2011年2月22日

## 南あわじ市における調査と研究を通して

協力研究員：倉田 誠



淡路瓦産業の現地調査にて

本年度、私は、協力研究員として、南あわじ市との地域連携協定にもとづく研究プロジェクト、及び、同市での現地調査を軸とした教員と研究員が主導する学生参加型の研究教育に従事してきました。

具体的には、修士課程の大学院生や研究員に対して、夏期に行われる現地調査に向けた調査技法や論文執筆に関する指導

を毎週行い、調査を終えた後はその成果を報告論文としてまとめるための相互検討の場を設け、学生・研究員・教員の間での議論を重ねてきました。また、南あわじ市の淡路瓦産業を対象とした本年度の現地調査では、個々の学生の関心に応じた調査が展開できるよう現地のインフォーマントの方々の協力を仰ぐとともに、交通・宿泊施設の確保、エクスカーション・ルートの設定、現地調査の指導・監督などを行いました。その一方で、私自身も、淡路瓦産業に関する調査・研究を進め、瓦需要の減少と大規模メーカーを中心とした産地構造の揺らぎという環境の変化に向き合う産地社会の状況を投稿論文にまとめることが出来ました。

これまで、オセアニア地域における近代医療の浸透と地域社会の変容を研究テーマとしてきた私にとって、このような日本国内の地域社会の動きに触れ、それを研究成果としてまとめる作業は、新鮮で発見に満ちたものでした。また、現地調査の準備や指導を行い、教員や学生たちとともに1年を通して1つの対象に向き合えたことは、貴重な教育経験でもあったと考えます。

## 東ドイツの映画音楽に関する資料調査

協力研究員：高岡 智子



旧東ドイツ時代の典型的なブレハブ構造の高層住宅

2010年9月7日から16日間、ベルリンにて東ドイツ映画と映画音楽に関する資料調査とインタビュー調査を行った。これまでの映画音楽に関する先行研究は、東ドイツ時代に行われたものが大半を占め、東西ドイツ統一後は資料へのアクセスの難しさもありほ

んど研究が進んでいない。

今回の調査では、公文書などの資料調査だけではなく、東ドイツ時代の映画音楽作曲家にインタビュー調査を行うことで、記述資料と現場の声の類似点と相違点を明らかにすることを目指した。資料調査については、連邦公文書アーカイブ (Landesarchiv) にて、調査対象の映画『パウルとパウラの伝説』(1973) に関する政府側の公文書や資料を閲覧、収集した。また、連邦公文書アーカイブ直属のアドバイザーと意見交換を行い、研究を進めるうえでのアドバイスを得た。この時点で、東ドイツでは映画に関する文化政策は厳しく規定されていたものの、映画音楽に関しては定まっていなかつたことが判明した。映画音楽作曲家については、ポツダムにあるドイツラジオアーカイブ (Deutsches Rundfunkarchiv) で調査を行った。ここでは、東ドイツ時代の映画音楽作曲家、ロックグループ、東ドイツの音楽ジャンル「娯楽芸術 (Unterhaltungskunst)」について調査を行うことができた。その他、ベルリンにある国立国会図書館の音楽部門では、東ドイツ時代に映画音楽作曲家として活躍したペーター・ラーベナルトの遺品を調査した。

インタビュー調査は、『パウルとパウラの伝説』の映画音楽を手がけた作曲家ペーター・ゴットハルトと連絡を取り、ゴットハルトの自宅にてインタビューを行った。このやり取りのなかで、必ずしも東ドイツでの映画製作が社会主義統制下だからといって劣悪だったわけではなく、共同作業や製作期間など自由になる部分も多いこともわかった。

今回の調査研究を通して、東ドイツ映画あるいは映画音楽はイデオロギーの側面から語られるだけでなく、一般的なエンターテイメントとしても捉える必要があるのではないかと考えるきっかけとなった。来年度に向けて、東ドイツの映画音楽という未開拓の分野を切り開くだけでなく、この分野が他の領域とどのように関係し合っているかについてさらに考察を深めていきたい。

## 私の研究報告

協力研究員：鬼頭 尚義



研究中の私

自身の研究テーマである歌人伝説（藤原実方）については、本年度は栃木県宇都宮市に鎮座する雀宮神社に残る縁起に焦点を当てて研究を進めた。雀宮神社には、一条朝の歌人である藤原実方が雀となって飛来したという縁起が残されているが、当初から実方を主人公とした縁起が存在していたわけではない。雀宮神社の縁起は、享保年間に初例が確認できるが、それは藤原行成を祭神とする縁起であり、紀貫之の説話を絡めた縁起でも

あつた。こうした縁起が形成された背景には、貴之と実方には共通点があり入れ替わりやすい歌人であったこと、さらには貴之自身も「落冠説話」の系譜に属する貴族であったことが考えられる。

18世紀末以降になると、行成を祭神とする縁起から実方を祭神とする縁起へと変化していく。その背景には、神社側が管理する縁起と巷間に流布している俗説が食い違っていた事が挙げられる。そして結果的に神社側は巷間に流布していた説を取り込む形で、実方を祭神とする新たな縁起の製作に至つたのであったそれが『雀宮神社略縁起』であった。巷間に流布していた説話が、神社側に伝えられていた縁起を駆逐し、縁起そのものを書き換えた先に『雀宮神社略縁起』の成立背景があり、それこそが、雀宮神社縁起の特質であると言えよう。

今後は、雀宮神社縁起が他の寺社縁起から受けた影響、さらには特定の集団が縁起形成に関与していた可能性を探る事も視野に入れて、論を進めていく必要がある

また神戸大学国際文化学研究科が取り組んでいる、南あわじ市の地域研究に関しては、淡路人形淨瑠璃の淨瑠璃台本を翻刻し論文発表を行つた。今年度発表した論文では、実在する海軍中尉・三浦容夫をモデルとした「三浦中尉物」の紹介および翻刻をした。淡路人形淨瑠璃の台本には、この他にも実在の人物をモデルにしたと思われる台本が幾つか存在するので、順次報告していく次第である。

## 協力研究員合同発表会



協力研究員合同発表会（2011年3月10日）

- ・高岡智子 「東ドイツの映画音楽とロック—文化政策の観点から」
- ・鬼頭尚義 「淡路人形淨瑠璃に見る日露戦争—『三浦中尉物』の紹介を中心に—」
- ・ヴィヴィアン・ブッシンゲル - カバリ 「マイノリティー児童の言語学習を考える—母語教育か継承語教育か」
- ・沼田里衣 「『臨床音楽学』の構築の可能性について—コミュニケーション音楽療法の視点から」
- ・倉田誠 「手間をつくりだす—淡路瓦産地の窯元たちの新たな働き方」

## ■ 本年度の活動報告

### 2010年

4月24日	「インドの小さな学校で開催されたウォールアートフェスティバル2010」凱旋報告会
5月1日～5日	「日独文化交流インターナショナルチャラル・ワークショップ」
6月8日～9日	トーキイベント「場所とアートの魔術性～神戸と別府の場合～」
7月26日	「EUにおける少数民族保護政策～東方拡大とその後」（講師：坂井一成准教授）
8月9日～22日	Oxbridge Summer English Program の実施
9月23日～26日	「欧日気鋭の音楽家による神戸国際芸術祭」の企画運営
9月27日	「明治初期の数学教育—菊池大麓の政策をめぐってー」（講師：リヨン大学博士課程 / マリオン・クーザン氏）
9月30日	「異境からのまなざし—テオドール・W・アドルノの社会学的・美学的著作における亡命経験ー」（講師：ドイツ・ヒルデスハイム大学哲學研究所研究員/エバーハルト・オルトラント氏）
10月29日	「少数民族の言語政策—オクシタニ語、カルカッソンのデモ行進から」（講師：名古屋市立大学大学院人間文化研究科准教授・佐野直子氏）、「EUにおける少数民族保護と『人の移動の自由』原則」（講師：寺尾智史助教）
11月25日	「川本幸民生誕200周年記念講演会 川本幸民の科学研究—当時のオランダの産業化と軍事科学の観点からー」（講師：塚原東吾教授）
12月2日	第1回学術講演会「オーストラリア遠隔地のアボリジニのハイブリッド経済—理想主義と現実主義」「オーストラリア・アボリジニの写真表象—1847年から1920年を中心に」（講師：オーストラリア国立大学教授のジョン・アルトマン氏とニコラス・ピーターソン氏）
12月3日	「21世紀のフランス文学—資本・越境・記憶」（講師：東京大学大学院人文社会系研究科・文学部准教授）
12月22日	「ミランダ語と映画『日本からミランダの大地へ』—フィールドワーカーがインフォーマントに映像として料理される位相」（講師：寺尾智史助教）

### 2011年

1月26日	「2011年におけるチェコ共和国」（チェコ共和国名譽領事館、EUインスティテュート関西、兵庫EU協会、（公財）兵庫県国際交流協会、関西チェコ / スロバキア協会、神戸大学大学院国際文化学研究科・異文化研究交流センター共催）
-------	---

1月26日	「19世紀英國科学者によるグランド・ツアーチャーチーズ・バベッジを中心にしてー」（講師：野村恒彦協力研究員）
1月25日	「チェコ共和国駐日大使カテジナ・フィアルコヴァー氏講演会「2011年のチェコ経済」（EUインスティテュート関西と神戸大学大学院国際文化学研究科・異文化研究交流センター共催）
2月5日	「比較文明学会主催、異文化研究交流センター共催「比較文明学会第90回例会」
1月20日	「第1回国際文化学のフロンティア（第1回アフリカ文化研究）研究発表会「呪詛と祝福の民族誌にむけてーこれまでのフィールドワークからー」（講師：梅屋潔准教授）
2月8日	「現代フランスにおける多文化共存の実情」（講師：坂本千代教授・松井真之介協力研究員）
2月28日～3月1日	「神戸大コミュニケーション vol.16「Baby Meets Music 0歳からの親子コンサート」
3月8日	「淨瑠璃ワークショップ 義太夫節を語ってみよう！」（講師：淡路人形座・竹本友庄氏・鶴澤友勇氏）
3月10日	「異文化研究交流センター・協力研究員合同発表会」
3月14日	「公開シンポジウム（神戸定住外国人支援センターとの共催）「在日外国人高齢者の生活課題」（パネリスト：金宣言、Ha Thi Thanh Nga、水野浩重）
3月18日	「アートマネジメント若手フォーラム in Kobe」（金沢21世紀美術館館長の秋元雄史氏をお招きして）



第1回 国際文化学のフロンティア（第1回アフリカ文化研究）研究発表する梅屋潔准教授（2011年1月20日）

## ●アートマネジメント地域連携部成果出版物

藤野一夫編（井原麗奈、岡本結香、小石かつら、小林瑠音、近藤のぞみ、竹内利江、沼田里衣、松井真之介、宮治磨里）『公共文化施設の公共性』水曜社、350頁、2011年3月（ISBN978-4-88065-257-3 C0030 ￥3200+税）

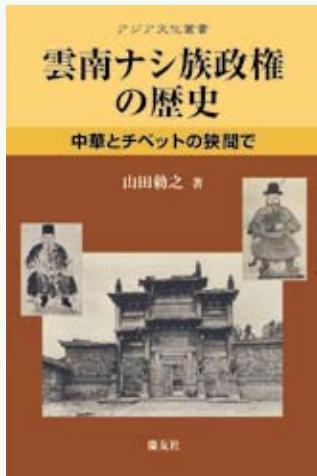


異文化研究交流センターの調査研究プロジェクトの成果が公刊された。公共文化施設とは固有のプロデュース機能を備えた舞台芸術施設で、長期的な人材育成事業や前衛的・実験的芸術への支援なども大きな役割。しかし運営と発展には多額の公的助成が必要となり、市民らの合意が不可欠である。本書では、地域と市民社会の形成に公共劇場が果たすべき役割である「公共性」が、個人と社会の関係を安定的・持続的に紡ぎ、「新しい公共」をつくるという観点から、公共文化施設の本来の使命を「運営・連携・哲学」をテーマとして多角的に考察した。

（藤野 一夫）

## ●学術推進研究員出版物

山田勲之著『雲南ナシ族政権の歴史—中華とチベットの狭間で』（東京外国语大学アジア・アフリカ言語文化研究所・歴史民俗叢書8）慶友社、2011年3月（ISBN978-4-87449-175-1 C3039 ￥7000+税）



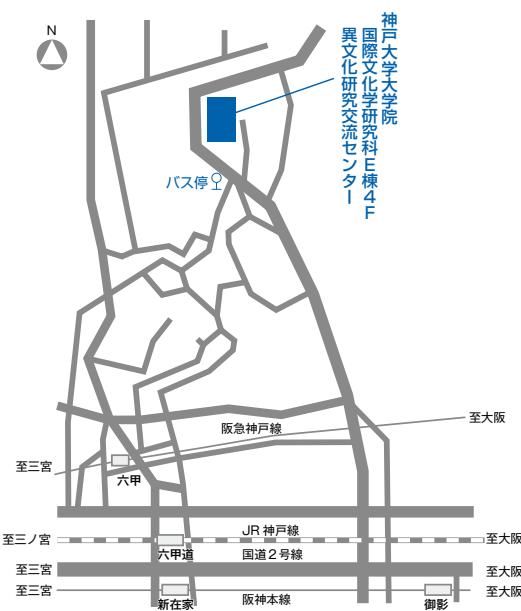
中華とチベットの狭間・雲南麗江。現在、世界文化遺産に指定されているこの地に、かつて一大勢力を誇ったナシ族政権が存在した。本書は彼らが織りなす歴史的動態を、漢文史料だけではなく、チベット語史料をも駆使して立体的に再現するものである。従来の認識とは異なる非漢人政権の姿を目の当たりにすることができるだろう。

（山田 勲之）

## 編集後記

めぐりあわせにより、今回異文化研究交流センター・ニュースレター創刊号編集の大任を担うことになりました。このような仕事をしたことがない私にとって、はたして完成にこぎつけるのか不安でありましたが、諸先生方や協力研究員の皆様のご協力により曲りなりにも発行まで至りました。感謝申し上げます。同時に編集者の労苦を体感することにより、原稿執筆要項や提出期限の厳守の大切さを改めて認識することができました。

（学術推進研究員：山田 勲之）



◆交通アクセス：阪急「御影」、阪急「六甲」、JR「六甲道」下車。市バス16系統「六甲ケーブル下」行に乗車。「神大國際文化学部前」下車。徒歩3分。

## 異文化研究交流センター ニュースレター 創刊号

発行日：2011年3月31日

編集・発行：神戸大学大学院国際文化学研究科・異文化研究交流センター  
連絡先：神戸市灘区鶴甲1-2-1

電話・FAX：078-803-7650

E-mail: irec@ccs-srv.cla.kobe-u.ac.jp

Webアドレス: <http://web.cla.kobe-u.ac.jp/group/IReC/>

印刷所：株式会社 ルネック

